



それは目眩に似た感覚だった。体が漆黒の空を漂っているような。上下左右の感覚も無く、木の葉のように流されていく。俺の周りを流れているのは大小様々な星たちだ。赤い星、青い星、金色や銀色に光る大小の星たちが俺を押し流していく。これは夢か。川の向こう岸には、美月がいる。たぶん、俺はそこに行こうとして川に流されてしまったのだ。美月は何かを叫びながら俺に手をさしのべている。でも、その手は届きそうで届かないところにある。俺は必死になって川を泳ぐのだが、どうやってもそれ以上は美月に近づけない。川の下流に目をやると、そこには青い地球が浮かんでいる。星の川は、その地球に流れ込んでいる。俺はもう一度美月の手をつかもうと上流に目をやって凍りついた。巨大な星が、川を流れてくるのだ。美月はそれに気づいていない。このままでは・・・ダメだ、動けない・・・。

「美月、上を見る。危ない！」

俺は叫んだが、次の瞬間、すべてが消えて俺は暗闇に包まれていた。

夢か……。気がつくとき窓から朝の光が差し込み、小鳥の音が聞こえている。悪い夢だ。じつとりと汗ばんだ体の不快さを感じながら、俺はぼんやりと天井を眺めていた。そういえば、静止軌道からのシャトルで見た夢。あの時も川に向こう側には美月がいた。まるで、あの夢の続きを見たようだ。何か落ち着かない。

「ケンジ、大丈夫かい。だいぶうなされてたようだけど」

ジョージが心配そうにそう言う。

「いや、なんだかおかしな夢を見たよ。変な気分だ」

俺はそう言うと、とりあえず起き上がる。なにやら体中汗だくになっている感じだ。とりあえずシャワーでも浴びたい。俺は力一杯背伸びをして、それから深呼吸する。体に酸素が行き渡って、意識がはっきりしてくる。

「ケンジが悪夢なんて珍しいね。疲れてるのかい」

「いや、悪夢・・・というか、おかしな夢だったよ。確かに、ちょっと疲れてるのかもしれないな」

「まあ、美月にケイ、それから沙依ちゃんの3人を相手にするのは、流石のケンジでも大変かな」

ジョージは冗談のつもりかもしれないが、正直言ってシヤレにらんわけで・・・。

「そう思ったら、ちよつとは手伝ってくれ」

「うーん、僕には厳しいね。遠慮しとくよ」

「あつさりと言ってくれりぜ」

俺はそう言うのと。パジャマを脱ぎ捨て、そのまま風呂場へ行って、ざっとシャワーを浴びた。しかし、あの夢はなんだったんだろう。どうして、またしても美月なんだ。それにあの星は・・・。そんなことを考えながら、俺はしばらくシャワーの下で固まっていた。



300年前の建造物集約の際、東京湾岸の埋め立て地も大幅に整理され、東京湾を囲むように階段状の集合住宅区画が作られ、人工島のいくつかには、オフィスエリアや商業施設、公園や遊園地などが整備された。住居やオフィスエリアの地盤は海面から50mほどの高さに造成され、数百年に一度発生する大津波にも耐えられるように作られている。もちろん、巨大な津波を打ち消す技術も300年前には、ほぼ実用段階にあったのだが、万一それらが使えなくなった場合も想定して、こうした対応がなされたのである。海沿いは遠浅の砂浜や干潟が造成され、夏には海水浴客で賑わっている。かつて、工場排水や生活排水で汚れきっていた東京湾も、今は透明度が数十メートルの場所もある綺麗な海になっていて、様々な魚や海洋生物、海鳥などの楽園になっているのである。

俺たちは、車でベイエリアへと向かう。隅田川沿いを下ると、やがてなだらかな丘が見えてくる。川は丘の手前で地下へ消える。川沿いの道路は丘を上がる道とトンネルに枝分かれするが、俺たちの車はトンネルに入る。このトンネルは住居地区の下を抜けてその先の人工島エリアに繋がっているのだ。

やがて車はトンネルを抜ける。目の前には青い海が広がって、まるで南の楽園にきたような気分になる。中央公園は隅田川河口の周囲に作られていて、林の向こう側は砂浜になっている。

俺たちは東口のロータリーで車を降りる。ちよつと湿気を含んだ風が海の香りを運んでくる。

「あ、お兄ちゃん、あそこだよ」

沙依が指さした方に、美月、ケイ、マリナ、サムの4人が見える。しまった、後れを取ったか。この分だと、また美月が騒ぎそうだ。

「遅い！ 私たちを待たすなんていい度胸ね」

・・・と、こうなるわけで、いきなり美月の文句が飛んでくる。

「遅いって、まだ時間には少しあるだろ」

「ふん、ぎりぎりに来るなんていい度胸だって言ってるのよ」

「まあまあ、皆さん揃ったことだし、とりあえず海辺へ行きませんか」

いいタイミングでマリナが入ってくれて、俺たちは林を抜けて砂浜のほうへ向かう。海辺には、小洒落たテラスが並んでいて、水着姿の人たちがくつろいでいる。マリナが朝のうちに予約を入れてくれていたようで、俺たちはテラスのビーチパラソルを二つ確保できた。

「さて、とりあえず水着に着替えかな」

「そうですね」

「ケンジ、期待していいよ。マリナの水着姿はちよつとすごいから」

「え？何がですか？普通ですよ」

マリナがちよつと赤くなっている。

「じゃ、沙依も着替えよつと」

ケイ、マリナ、沙依の三人は、そう言うと更衣室のほうへ歩いて行く。

「あれ、美月は行かないのか？」

「そんな気分じゃないわ。ほつといてくれる」

美月はそう言うと、デッキチェアにどかっと座ってしまった。そう言えば、なんとなく今朝

は様子がおかしい。不機嫌、なのはいつものことではあるのだが、単に不機嫌というだけではない、なにやら不穏な感じがするのは気のせいだろうか。

「どうしたんだよ。何か気になることでもあるのか？」

「なんでもないわ。だから、ほっといてって言うてるでしょ」

まあ、ここで根掘り葉掘り聞いても、それで何かを喋る美月じゃないのは承知している。それどころか、さらにご機嫌を損ねる可能性が高い。とりあえず、様子を見ておこう。

「とりあえず、俺たちも着替えようか、ジョージ」

「そうだね。あれ、サムは？」

「泳ぎは苦手。だから、私はここでも本でも読んでいる」

「そっか。それじゃ・・・」

ここまで来て泳がない手はない。美月とサムを残して、俺とジョージも、着替えに更衣室へ向かう。とりあえず、水着に着替えて戻ったが、女子たちはまだ戻っていない。まあ、何かと時間もかかるのだろう。サムはデッキチェアで本を読んでいる・・・と言っても実際のところ、俺たちに本が見えるわけではない。これも、インターフェイス経由で視覚に直接渡されている情報だからである。美月はと言えば、あいかわらず不機嫌そうな様子で帽子を顔にかぶって寝そべっている。ちよっと気になるのだが、だからといって声をかければ余計に機嫌を損ねてしまうに違いない。触らぬ神に祟りなしである。

「お兄ちゃん」

沙依の声だ。振り向けば花柄のフリルがついたビキニを着て走ってくる。いつのまにか、ずいぶん成長している妹に、俺はちよっとドキドキする。沙依の水着姿なんて、小学校時代以来かもしれない。中身はあまり変わっていないように思うのだが、外見はまったく別人みたいだ。

「どう？沙依の水着。この前、新しく買ったばかりだから、これがお披露目だよ」

「まあ、なんだ。いいんじゃないかな？ビキニはちよっと早い気がしないでもないが」

「お兄ちゃん、テレてるでしょ。沙依ももう子供じゃないんだからね」

「何を生意気な。十年早いわ！」

「えー、十年もたったたら、おばさんだよ」

沙依が大きな声で言うので、俺は慌てて周囲を見回した。幸いにも、気づいた女性は周囲にはいないようだ。小心者の俺は、こういうところをつい気にしてしまうのである。

「お前な。大声でおばさん言うなよ」

「おばさんって誰のことかなあ？」

気がつくくとケイが脇に立っている。これまた結構悩ましい黒のビキニだ。

「あ、ケイさん。黒って大胆ですよ。いいなあ、大人っぽくて」

「あはは、沙依ちゃんのものなかなか似合ってるよ。じゃ、二人でお兄ちゃんを悩殺しちゃうか」

「いいですね。お兄ちゃん、さっきから沙依のこと見てデレてるんですよえ」

「ケンジってば、妹にデレるなんて不純だねえ。これは、悩殺しがいがあるかも」

「あんなあ、やめてくれ」

と、目をそらした先に白のビキニを着たマリナ。すらっとした長身に、なんとというか、出るところはしっかり……。もう目のやり場がない。

「おお、マリナは白か。うーん、沙依ちゃん、こいつは強敵だ」

「うわあ、マリナさん、スタイルいいですよね」

ケイと沙依がマリナを食い入るように見つめるので、マリナはちよつと赤くなる。

「あの人、やめてください。恥ずかしいです」

「いやいや、マリナちゃん。そのボディーは見せなきゃもったいないでしょ。ほら、ケンジに見せびらかしちゃおうよ」

「だめです。見ないでください」

そう言われると見なくなるのが男心なのですが、マリナさん。でも、さすがに刺激が強い。

「よし、泳ごう！」

俺はそう言うのと海に向かって走り出す。いや、この状態はあれこれマズい。理性に反して体が反応してしまうわけで……。とりあえず、海に入って頭を冷やそう。

「こら、逃げるなケンジ！」

「ケイさん、マリナさん、私たちも行きましょう」

「そだね。逃げてでも無駄無駄。マリナ、行こう」

「あ、あの・・・」

沙依が勢いよく走り出し、ケイはマリナの手を引っ張って後を追うように海に入ってくる。簡単に逃がしてもらえとは思っていないが、まあ、海の中ならなんとかかなりそうだ。俺は沙依めがけて思い切り水をかける。

「きやつ！お兄ちゃん、しょっぱいよ。いきなりはずるい！」

顔に思い切り塩水を食らった沙依がそう言う後ろから、いきなりケイの攻撃が来る。なんと、ケイの奴、いつのまにか、特大の水鉄砲を持ってやがる。これは反則だ。そもそも二人相手は、かなり分が悪いのだけど、武器は想定外。火をつけてしまったのは俺だから、ここはなんとか頑張るしかなかろうと思うのだが、いかんせん素手では防御が精一杯である。ここはもう、やぶれかぶれで反撃するしか・・・

「きやつ・・・」

いかん、ケイに水をかけたつもりが、その後ろのマリナに思い切りかかってしまった。

「あ、マリナ、ごめん」

「ケンジ君、ひどいです」

「よし、マリナも参戦ね。みんなでケンジをやっつけよう」

ケイはそう言うと、マリナをぐいと前に押し出した。最悪だ。マリナまで巻き込んでしまうとは・・・。マリナ相手に反撃するのはちよつと気が引ける。かといって何もしなければ、沙依とケイの餌食になってしまうのだが。

「よし、沙依ちゃん、今だ。やっちゃおう」

「了解です！」

正面にいるケイの水鉄砲を防いでいる間に沙依が後に回り込む。ケイの前にマリナがいるの

どうかつに攻撃できない。これは卑怯だ。

「スキありっ！」

「お、おい、沙依、なにを・・・」

なにやら背中に柔らかい感触が・・・こ、これは・・・で、次の瞬間、体が後に引っ張られ、俺はバランスを崩す。踏ん張ろうにも足元は砂地だ。次の瞬間、俺は仰向けに倒れて頭から波をかぶっていた。

「ぶわっ、げほっ、げほっ・・・」

俺は、その弾みで思い切り水を飲んでしまう。いくらなんでも、これはやり過ぎだ。

「さ、沙依っ！何するんだ。殺すつもりか！」

「あ、ごめん。まさか転ぶとは思わなかったよ。大丈夫？お兄ちゃん」

「大丈夫もなにも、思い切り水を飲んじゃった」

「ケンジ君、大丈夫ですか？」

マリナが心配そうに言う。いやいや、あなたのせいではありません。すべて、この沙依とケイが・・・

「お兄ちゃん、ほんとゴメン。悪気はなかったんだよ」

またしても上目遣いの沙依である。この顔を見せられると怒る気にもなれない。

「いやいや申し訳ない。ちょっとやり過ぎたかも」

「あのなあ、だいたいそれは何だ。いつの間に・・・」

「あ、これ？水遊びには必須アイテムだし、昨日のうちに調達しといたんだよね。思ったより強力だったなあ」

「俺で試すなよ。だいたい、人の顔に向けてはいけません、って書いてなかったか？」

「ごめん。説明書は捨てちゃった」

「ったく・・・」

とりあえず、騒ぎはここで一段落。ジョージも加わって、しばらく水遊びに興じた俺たちだ

った。

それから小一時間くらい遊んだだろうか。俺はふと浜のほうに目をやる。美月はあいかわらず、帽子を顔にかぶって寝転んでいる。サムも読書に余念が無いようだ。

「美月さんたち、泳がないのかな」

脇にきた沙依が言う。

「まあ、泳ぎたくないんだったら無理に泳ぐこともないさ」

「でも、今朝からちよつと様子がおかしいんだよね。何か悩んでるみたいって言うかさ」

ケイがちよつと心配そうに言う。たしかに、今朝の様子は少しおかしい。時間がたてば、機嫌も良くなるだろうと思っていたのだが、これは、ちよつと探りを入れてみた方がいいかもしれないな。

「ちよつと休憩するか」

「そだね。少しお腹も空いたし」

「それじゃ、皆さんで食事にしませんか？」

「賛成！沙依もお腹。べこべこだよ」

俺たちは、海から上がると、まだ不機嫌そうな美月とサムを促して、近くの海の家に入った。この「海の家」というのは、昔から日本にあった海辺の休憩所を再現しているらしい。オープンで風通しが良く、海辺の雰囲気味わいながら飲み食いできるのがいい。注文もインターフェイス経由ではなく、店の人が聞いてくれるという、極めてクラシクな雰囲気である。

「沙依はカレーライスがいいな」

「あ、それじゃ私は焼きそばで」

そんな感じで、それぞれ思い思いに食事を注文して、早めの昼飯となった。

「いやあ、やっぱり地球の海はいいよね。この開放感。宇宙都市のプールじゃちよつと味わえないよ」

「そうですね。でも、日焼けには気をつけないと後が大変です。皆さん、日焼け止めは大丈



夫ですか？」

「沙依はちよつと腕が焼けちゃったかな。後で日焼け止めをぬりなおさないよ。あ、お兄ちゃん、後で手伝ってよ」

俺はちよつと飯を吹きかける。沙依の奴、兄貴をからかうのはいい加減にして欲しい。

「おお、それじゃ私もお願いしようかなあ」

とケイもそれに乗ってくるから困りものだ。この二人、変なところで気が合いそうだから困る。この流れだとまた、美月のご機嫌が悪化しそうだが・

「あれ、美月。なんか静かだね」

ケイがまた余計なことを言う。

「どこか具合が悪いんですか？朝から調子悪そうですが」

マリナがちよつと心配そうに言う。いやいや、マリナさん。こいつの不機嫌はいつものことですから、あなたが心配するようなことではないですよ。

「美月、なんだか知らないけど、せつかくみんな海に来たんだから、もうちよつと楽しめよ」

「……」

「どうしたのさ。何か怖い夢でも見た？」

「あのねえ、子供じゃないんだからバカなこと言わないでよね」

「夢なら、俺も変な夢を見たけど、まあ、気にしだしたらきりないからな」

「変な夢？」

「ああ、自分が星の川に流されて地球に落ちていく……みたいな」

「星……の川？ それって……」

「ああ、それに上流から何か大きな星が流れてきてな」

「おお、夢占いでもしてみようか。何か欲求不満の……」

「ちよつと待ちなさいよ。まさかその夢……」

「そうだ。美月も出てきたぞ。川岸で俺を助けてくれようとしてただけだな、手が届かなくて。それに流れてくる星には気がついてなかったみたいだが」

「へえ、なんだか七夕の番外編みたいな夢だね。牽牛が天の川を泳いで渡ろうとして、溺れた・・みたいな」

ジョージが横から口を挟む。意外だが、こいつはこういう昔物語をよく知っている。

「牽牛はいいけど、織り姫が美月ってのがな・・」

「あんたねえ、それはこつちのセリフよ。もういいわ。なんだかバカらしくなってきたわよ」

美月は、そう言いながらラーメンを勢いよくすすった。このラーメンというのも、昔々の食べ物への復刻版らしい。スープに入ったヌードルだが、海の家定番メニューのひとつだったそうだ。それから、なぜか美月はいつもの調子を取り戻し、午後からは、これまた物騒な水鉄砲を持ち出して、ケイとの撃ち合いが始まった。俺が、その流れ弾ならぬ塩水をさんざん浴びたことは言うまでもない。何も、俺を挟んで戦争ごっこをすることもないだろうに。沙依とマリナは砂浜に、いつのまにか立派な砂の城を完成させていた。ジョージは、しばらく一緒に泳いでいたが、そのうち疲れたのか、サムの隣で居眠りを始めていた。そんな感じで、夕方まで大騒ぎした俺たちは、海沿いのレストランで夕食をとった。レストランから出ると、もうすっかり日が暮れていて、空には満天の星が輝いていた。

「うわー、綺麗な星だね。ちよつと海辺で見ていけない？」

「そうですね。私もそうしたいです」

「よし、それじゃ行こうか」

俺たちは、また海辺に出て、堤防に腰掛けて空を見上げた。湾岸地区の施設は、光を空に向けてないように設計されている。だから、都会なのに空は暗く、天の川もはっきりと見えるのである。

「こういう、またたく星も風情がありますね」

「大気の底にいますという感じがする。「面白い感覚」

「えっと、牽牛と織り姫ってどれだっけ」

「たしか、わし座のアルタイルとこと座のベガだろ。はくちよう座のデネブを入れて夏の三大角が目印だな」

「へえ、ケンジも詳しいね」

「えへへ、お父さんに習ったんだよね。お兄ちゃんも」

「ああ、そうだな。親父がこういうのが好きだね」

「でも、これだけ星が多いと、宇宙と同じで星座がよくわからないよねえ。そうだ、ジョージ、星座出してよ」

「あはは、そう言うと思ってたよ。じゃ、全員、DIで情報共有モードに。美月の回線、ちよつと借りるね」

「そのうち何か奢りなさいよね」

俺たちはDIユニットを取り出すと、互いに接続して情報共有モードに入る。そこへ、ジョージが例のコンピュータから星図の情報を流して視覚に重ねてくれるという仕組みだ。まるで、プラネタリウムのように、星空に星座の絵が重なる。

「それじゃ、わし座とこと座、はくちょう座を出してみるよ」

ジョージがそう言うと、天の川を挟んで星座が三つ浮き出した。

「そして、これが大三角、つまり、アルタイル、ベガ、デネブ」

天の川を背景に明るい三つの星をつなぐ三角形が浮き出る。

「すごい。これ、お父さんが見たら、きっとびっくりするね」

沙依が言う。親父ならたぶん、ジョージに根掘り葉掘り方法を聞いて、マネしようとするに違いない。家の中にまたガラクタが増えることになるのは確実だ。

「あれ、お兄ちゃん、あの星は？」

沙依が指さす方向に、明るい星がひとつ。でも、ジョージの星図には情報がない。

「あれ、何だろう。情報がないな」

「あの星？やけに明るいいし、またたきもしないから惑星じゃないの？」

たしかに美月が言うように、その星は不自然なほどにまたたかない。まるで仮想映像を見ているようだ。

「どの星だい？ 僕には見えないんだけど」

ジョージが言う。

「それに、今の時期、明るい惑星は木星か土星くらいだけど、ほら、どれもその方向にはないよ」

ジョージが言うと、木星と土星の位置が星図に表示された。

「それじゃ、宇宙船かステーションかな」

「それもデータにはないね。それほど明るく見えるんだったら航路局のマップには載ってるはずだからね」

「え、どれどれ？私にも見えないんですけど」

「私にも見えませんね」

「私も見えない」

「なんだって、それじゃ3人だけってことなのか？」

「おかしいな。まさかバグったかな？」

「おいおい、大丈夫か？」

「ちょっと調べるから、とりあえず今日はおしまいにしてくれるかな」

ジョージはそう言って星図を消すと、不思議そうに例の小箱を眺めた。しかし、どうして俺と沙依、それに美月だけに見えたのだろう。単にバグなら全員が見ても不思議じゃない。

「ちょっと冷えてきましたね」

「そうだね。そろそろ解散しよっか」

「あのー、美月さん。今晚、沙依も一緒にお泊まりしちやダメですか？」

「お泊まり？いいけど、家のほうは大丈夫なの？」

「こら、沙依。勝手にそんなことしたら、またお袋に」

「大丈夫だよ。朝、お母さんにはOKもらってきたし」

「おまえなあ、いつの間に・・・」

「よし、じゃ今夜は沙依ちゃんもガールズトークの仲間入りね」

「私も大歓迎ですよ」

これは、ちょっとまづいかもしれない。俺は沙依の手を引っ張って、耳元でさざやいた。

「おい、わかってると思うが、くれぐれも余計なことは・・・」

「わかってるってお兄ちゃん。大丈夫。お兄ちゃんの恥ずかしい話とかしたりしないから」

沙依は満面の笑みでそう言うのだが、その笑顔が物語るところを俺は知っている。明日、みんなに会うのがちよつと不安だ。それに、沙依がどんな情報を仕入れることになるのかも非常に心配である。例によってあの調子でいろんな事を根掘り葉掘り聞こうとするに違いない。

「そういえば、明日の夜は花火でしたね」

「そうそう。で、昼間はベイエリアのお店に浴衣を見に行くのよね」

「浴衣かあ、いいなあ。沙依にも買ってよ、お兄ちゃん」

「おまえなあ、浴衣だったら家にあるだろ」

「あれ、小学生の時のだよ。沙依も大きくなってんだからね」

いや、確かにあちこち大きくなっているのは知っているのだが、しかし、俺には浴衣を買ってやるなんて財力はない。

「私のお古で良かったらあるわよ。中学時代のんだけど、沙依ちゃんにはちょうどいいかもね」

「え、いいんですか？美月さん」

「いいわよ。でも一度着てみないと合うかどうかかわかんないけど」

「嬉しいです。ありがとうございます。美月さん」

こいつは、とうとう美月にまで取り入ってしまったようだ。俺の嫌な予感はどうも現実化しつつある。この旅の間に女子たちの俺に対する見方が微妙に変わりそうな気がするのは、決して俺自身にやましいことがあるわけではないのだが。

「それじゃ明日の夕方にケンジの家に集合だね」

「ああ。それじゃ、すまないが沙依をよろしくたのむ」

「おっけー。お兄ちゃんの恥ずかしい話をいっぱい聞いちゃうから」

「あのなら、そんなもんじゃないって」

「それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみ。また明日」

そんな感じで俺たちはまた別々に車を拾うと、それぞれの家に帰ったのである。